
怒りの日本その現実と猥雑

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怒りの日本その現実と猥雑

【Nコード】

N6390Z

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

イマジナリーコンパニオンを出してみました。「あねのねちゃん」の影響。

「ああ。生きていたって何もいいことがない。死んでしまおうかな」
「殺してやろうかな。そういううざいこと言ってる」と

松江は、包丁を見せる。

ぴかりと光った。

「そんな怖い目しないで」

「ふっふふふふ。いい包丁だろ。いい包丁だろ」

「包丁しまって!!」

なぜ圭子が自殺したがつてるかといえば、アルバイトだからだ。
アルバイトは低所得過ぎて、生活がすごく苦しい。死にたくなることしばしば。正社員にはわからない辛さだ。まあ正社員には正社員の苦労もあるかもわからないが。

でも、圭子はあきらめたくない。自殺するより生きたい。

松江は包丁をなめる。

「死ぬ予定なら、ほんま、あたしに刺させて」

「ちょっと考えさせて……」

圭子は部屋を出た。松江が待つてと叫んでも意味がない。松江は圭子が頭の中で勝手に作った想像上の友達なのだ。たまにこうして励ましてくれるのだ。

圭子は歩く。目的地は別にない。

「小説書かなくちゃな。そのためにアルバイトやってんだもの」

圭子は、太陽に向かってガッツポーズをとる。

「本当は死にたいんだろ？」

また松江だ。

「小説なんて難しい世界なものな。落選ばかり。本当は死にたいんだろ？」

「うるさいなあ。黙ってよ」

「お前に才能なんてあるのかい？ 死ねばいいじゃないか。死ぬと

「楽だよ」

「くう。腹立つね」

圭子は松江の腹を蹴飛ばした。「ぐはっ」

「黙れ。あたしは絶対にプロ作家になる。死んでたまるか！」

「その意気だよ圭子」

松江が腹を押さえながら、消えていく。

「松江。ありがとう……」

圭子は走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390z/>

怒りの日本その現実と猥雑

2011年12月21日15時50分発行